

## 前期：現代キリスト教思想研究1——近代から現代へ

オリエンテーション——現代キリスト教思想の諸動向

1. 西欧近代とキリスト教
2. 自由主義神学1——シュライアマハー
3. 自由主義神学2——リッチェルとハルナック
4. 自由主義神学3——トレルチ
5. ヘーゲルとヘーゲル主義
6. 近代聖書学と宗教史学派
7. キリスト教と社会主義
8. 弁証法神学1——バルト
9. 弁証法神学2——ブルトマン
10. 弁証法神学3——ティリッヒ
11. 解釈学的神学とブルトマン学派 7/4
12. 研究発表：岡田勇督、齋藤伎璃子 7/11
13. 研究発表：山田奈緒美、張旋 7/18
14. 研究発表：山下毅、山本恵美 8/1

## <前回>ティリッヒ

### (1) ティリッヒ思想とその射程

1. ティリッヒ(1886-1965)  
神学と哲学の境界（神学者・哲学者）、宗教社会主義、文化の神学、宗教史の神学  
ドイツからアメリカへ → 現代キリスト教思想は理論と実践の両面で変革を必要と  
している。
2. ティリッヒのフォイエルバッハ論
3. 宗教的象徴の理論：狭義の宗教を構成するもの
  - ・象徴の概念規定：多義性（非本来性）、指示、開示、参与（力・作用）、承認
  - ・宗教的象徴：無制約的なものを指示し、経験へと開示する。意味根拠の形態化・具  
体化する。
4. 狭義の宗教の構造：啓示相関（出来事と受容との相関）
  - ・広義の宗教（意味世界の根拠付け）の具体的な現実化  
究極的関心（ultimate concern）と自己同一性
  - ・宗教的象徴の真理：経験への適切性と自己否定性（十字架）
  - ・問題：象徴の指示対象とは何か → 宗教的実在論、宗教的真理論
5. 宗教と社会→宗教社会主義

### (2) ティリッヒ神学の方法と体系

6. ティリッヒ組織神学構想：  
「相関の方法」（Method of Correlation）によって構成される体系の横軸（横構造）  
＋ 三位一体論的あるいは救済論的な体系の縦軸（縦構造）
7. 神学の解釈学的構造と循環

- 1) 「相関の構造」: 「問いと答え」の相関＝解釈学的構造
  - ・問いの定式化 (哲学) ←状況
  - ・メッセージの答えとしての提示・解釈 (神学)
- 2) 「個と共同体」の循環: 共同体における問答・討論・対話の個人による集約
8. 「問いと答え」の定式化における哲学 (あるいは哲学的要素) の役割
10. 解釈学的中心 (意味付与原理) としての規範: 多様な素材を一つの意味連関へとまとめあげ、神学に組織あるいは体系という統合的な形態を与える。神学者の共同体性。

## 1 1 . 解釈学的神学とブルトマン学派

### (1) ブルトマン学派

「ガダマーの重要な著書『真理と方法』(Wahrheit und Methode, 1960、邦訳 1986、法政大学出版局) が出版されて以後になされた研究においては、聖書の世界と我々の世界との間の距離がいろいろと強調される傾向があった。もし、ガダマーの主張を真剣に受け止めようとするならば、古代の作家の意識は古代の文化的・言語学的文脈から切り離すことはできない。むしろ、これらの文脈があるがままに研究されねばならない。たとえば、D. ナイナム (Dennis Nineham) は、字句によっては、聖書において持たされている意味と等しい意味を持つ現代語を見付けることが常に可能なるかどうか疑わしいとさえ言っている。一連の「人文科学」(社会学、心理学、人類学など) の方法が聖書の記録の分析に応用され、そこに保存された諸文化を客観化し、それらの特殊性、異質性が強調されることになったが、これらの研究成果は、感情移入の方法によっては、古代の作家の心を本人が理解した以上に理解することはもちろんのこと、古代の生命世界を幾らかでも汲み取る事ができるということにも、疑いを投げ掛けることになっている。同時に、P. リクール (Paul Ricoeur) は、聖書のテキストがその著者の手を離れて以後たどるべき「経歴」(career) と名付ける事柄に新しい関心を寄せている。文書客としてのテキストが著者の意図を離れて、いかなる意味を持ちまた伝えて行くかという問題は、今日解釈学上の議論の中心近くに位置する問題となっている。」(リチャードソン/ボウデン編『キリスト教神学辞典』(教文館) の「解釈学」の項目より)

Gerhard Ebeling, *Evangelische Evangelienauslegung. Eine Untersuchung zu Luthers Hermeneutik*, J.C.B. Mohr, 1969 (1942).

#### Kapitel III: Das Verhältnis von Luthers Evangelienauslegung zur Tradition

##### 1. Die hermeneutische Tradition

1. ブルトマン学派、1950年代～60年代、聖書学から教義学へ。

フックス、エーベリング、リンネマン、ユンゲル

2. 後期ハイデッガーと言葉の出来事

Das Sein als Geschick, das Wahrheit schickt, bleibt verborgen. Aber das Weltgeschick kündigt sich in der Dichtung an, ohne daß es schon als Geschichte des Seins offenbar wird. (Wegmarken 339)

真理 (Wahrheit) は客観化され普遍される超時間的なものではなく、自らを隠しつつ顕わ

にする存在の歴運(Geschick)において、自らを出来事として生起（性起 Ereignis）する。

↓

時間・歴史が意味や真理の領域に属する。この真理の歴史的生成の中で、人間の真理への応答がなされる。

○. ペゲラー『ハイデッガーの根本問題——ハイデッガーの思惟の道』晃洋書房。

辻村公一編『ハイデッガーと現代』創文社。

ハイデッガー全集解題（大橋良介）、ハイデッガー命題集

## （2）解釈学と神学

### 3. 聖書解釈と哲学

・聖書解釈学の意義：規範的・典型的あるいは特殊的（リクール）

・神学と哲学との相互関連：

「一九六〇年代に表面化したキリスト教内の神学運動は、人類の生活のこのような世界史的变化に対応しようとする哲学運動と密接に関連している」（森田、33）、「哲学思想の動向を考え合わせて整理するなら、六〇年代以後に現われた新しい神学動向のうち有意義と思われるものだけを挙げるならば、次の四つの流れに大別されるであろう。

一、解釈学としての神学

二、歴史の神学（宗教学・宗教史の神学、科学論の神学）

三、希望の進学・革新の神学（解放の神学）

四、プロセス神学」（35-36）

解釈学、批判的合理主義、フランクフルト学派、プロセス哲学

### 4. ブルトマン

「理解しようとするような一切の解釈の前提は、テキストのなかで直接あるいは間接に語られている事柄への、そして問いの Woraufhin を導く事柄への前もって持っている生の関係である。・・・すべての解釈は、問題になっていたり、あるいは問われていたりする事柄についてのある確かな先行理解によってひ必然的に支えられている。」（298）

「聖書の学問的解釈の場合は、その Woraufhin は、聖書のなかで表わされている、人間の実存の理解を問うことのうちに見出される。」（305）

### 5. リクール

解釈学：回り道・間接的表現を経て自己へ。象徴から言語そしてテキスト、隠喩

・「解釈学とは、テキスト解釈との関連における、了解の操作の理論である」（143）

・個別的解釈学から一般解釈学へ：シュライアマハー、ディルタイ

・認識論から存在論へ：ハイデッガー、ガダマー

・解釈学と批判主義、ガダマーとハーバーマス

・哲学的解釈学と聖書解釈学

トンプソン『批判的解釈学——リクールとハーバマスの思想』法政大学出版局。

塚本正明『現代の解釈学的哲学——ディルタイおよびそれ以後の新展開』

世界思想社。

### (3) 解釈学的神学の試み

#### 6. イエスとパウロの関連性

イエスとパウロ（新約聖書神学の前提と新約聖書神学自体）との分裂、さらには、旧約聖書神学と新約聖書神学との分裂、という事態に対して。

「譬えという言葉の出来事」と「信仰義認論という言葉の出来事」という仕方での関連づけ（ユンゲル）

#### 7. 小田垣雅也

「解釈学的神学が意図していることは一つの哲学的神学の建設である」（小田垣 1、4）

「神の啓示と、それをうけとる人間の主体性の関係」

「神学と哲学とを橋わたしようという努力」

「神が開示、即ち啓示される出来事から出発する神学」(11)

「キリスト論の競合的要素の一方を落としたキリスト論を閉鎖的キリスト論と名づける」

(19)

「主観—客観構図による神認識を超克するそれぞれの努力」(小田垣 2、170)

上からのキリスト論：バルト、啓示から、神の子・受肉

下からのキリスト論：自由主義神学、パネンベルク？、歴史・経験から、  
人間イエス

キリスト論の循環構造：存在の順序と認識の順序、問いと答えの循環（循環の出来事的生起）

#### 8. 聖書解釈学の現場より、議論を再構築すること。

聖書解釈という営みは何か？

### <参考文献>

1. ブルトマン「解釈学の問題」（『ブルトマン著作集』12、新教出版社）
2. ガダマー『真理と方法』法政大学出版会。
3. リクール「解釈学の課題」「疎隔の解釈学的機能」「哲学的解釈学と聖書解釈学」（『解釈学の革新』白水社）
4. E. ユンゲル『パウロとイエス』新教出版社。
5. 森田雄三郎『現代神学はどこへ行くか』教文館。
6. 小田垣雅也『解釈学的神学』  
『哲学的神学』  
『知られざる神に——現代神学の展望と課題』創文社。